

表4 生育歴及び問題の経過と処遇(就学前)

胎生期	○受胎 父 34歳 母 26歳 ○母体 健康	
出生期	○熟産 ○微弱陣痛のため促進剤注射 ○へその緒が首にからみついていた ○体重 3350グラム ○泣き方 弱い	
乳幼児期	○首のすわり(4か月) ○歩行(1歳10か月) ○発語(マンマ)(2歳6か月) ○遊んでいるとき場面と関係ないことを話す(3歳6か月) ○あまり話さなくなる ○声もほとんど出さない。(4歳7か月) ○ひも状のものを振る(4歳8か月) ○友だちとは遊べない(6歳)	○1歳8か月 ことば、歩行などの発達が遅れている(母)(大学病院 脳波異常なし) ○3歳10か月 K保育園入園 保育園の紹介で児童相談所へ行く 精神発達遅滞の所見 ○4歳10か月 B保育園に転園 ことばの教室へ相談 ○5歳4か月 O保育園へ転園(昼の時間のみ通園) ○5歳 総合病院で受診、服薬、親の判断で間もなくやめる

表5 指導プログラム

(人とのつながり)

(物とのつながり)

1. ひとりで遊ぶ	1. 特定の興味ある物で遊ぶ
2. 身近な人がいてもいやがらない	2. 特定の興味ある物を探索する
3. 身近な人へ探索的興味を示す	3. いろいろな物へ探索的興味をもつ
4. 身近な人へ愛着、安心、依存的な行動をとる	4. 興味ある物を取ってほしいとせがむ
5. 身近な人との間で楽しいやりとりをする(非言語的→言語的)	5. 興味ある物のやりとりをする
6. 身近な人の模倣をする(非言語的)	6. 物の普通一般に認められている使い方を模倣する

表6 指導の結果 2年生 12月現在

1. ひとりで遊ぶ。 特定の興味ある物で遊ぶ。	○興味を示した物はひも、紙等で以前とあまり変化はない ○興味ある物が行くところがない場合は、ロッカーやひも出しをあけていたり、探すことが多い。
2. 身近な人がいてもいやがらない。 身近な人へ探索的興味を示す。	①1 教師が持っている(やっていた)興味のある物を取る。 ○教師の持っている物が、本児の好きなものであった場合は、教師のそばに来てそれを取ることが多くみられた。 ○教師が本児の好きな物を取ろうとしたりする場合は教師のそばにいくことが認められた。 ②2 教師のそばで自分の好きな遊びをする。 ○上品のことから移行することが多くみられた。 ○教師が本児に近づくとではなく、離れて移動したりすると、本児もその場所付近まで行く場合もみられた。 ③3 教師が本児に近づいてもひきこもらない。 ○本児の正面から(本児に気づかれて)教師が接近した場合は、身体をそらせたり、目をつぶったりなど、ひきこもり行動のみられた。このことは当初から現在まで同じようである。 ○教師がそばに近づくと、ひきこもらないともみられた。
3. 身近な人へ探索的興味を示す。	①1 教師(興味ある物)は持っていない(自分から近づく)。 ○本児から近づくことが認められたが、多くは教師が本児の方に視線を向けず、机に向かっていない状態であった。 ②2 教師の身体にさわると。 ○上記の2の2からの移行が多く、時々認められた。 ○本児がさわると教師の身体は、手や顔、首などであり、時には教師のほほをたいたり、口づけをしたりすることもあった。 ○このような場合には、好きなひもなどは持っていないことが多かった。 ○また、わらわいの表情や、わらわいの声なども認められた。 ○本児が教師の身体にさわっている場合、教師の表現(きょっとどきまじり)が、本児にとってオーバーだったりすると、急に動作を中断したり、表情が変わったりすることが認められた。 ③3 教師の行動に興味を示す。 ○教師が歌ったり、歌に合わせて動作をしたりすることには、興味を示さなかった。 ○本児の首の角度や動作の模倣についても、ほとんど興味を示さなかった。
4. 身近な人へ愛着、安心、依存的な行動をとる。	①1 おAママだっこを要求する。 ○おAママのよきときのみならず、おAママのよくないときにも時々、教師の背中におまようとうすることが認められた。

六年)本児の四大家族。本児の養育の中心は母であり、時々散歩につれ出したりしている。  
○ 諸検査  
・ 大脇式精薄児用知能検査 検査不能  
・ 遠城寺式乳幼児分析的発達検査 移動運動三歳六か月(発達年令以下同じ)、手の運動一歳三か月、言語発達六か月、情意の発達七か月、知的発達六か月、社会的発達五か月  
○ 医学的所見  
・ 重度の精神薄弱。脳波記録からみてなんらかの器質的障害が推定される。(五歳時、総合病院)  
・ 自閉症(八歳時、大学病院)  
○ 指導の経過(第一学年)  
・ 養護・訓練に関する指導として、学級担任が中心となり、本児の好むひも

などを媒介として、あるいは、からだのふれあいを通して、対人関係の改善への指導を試みた。結果は、きげんの良いときには、自分から教師のひざにのつたりすることもみられたが、教師が積極的に働きかけるとひきこもりが多くなされた。  
④ 教育の方針  
本児の対人関係の改善について、これまでの学級での養護・訓練に関する指導だけでは、効果が期待できにくいので、第二学年ではそのほかに、担当者による養護・訓練の時間を設定し、個人指導をすすめていく。(週三回、一単位時間四十分、一回一〜二単位時間)  
⑤ 指導仮説  
これまでの取り組みで、物を媒介として、あるいは身体接触等を通しての

教師の積極的な働きかけは、ほとんど効果がなく、かえって本児のひきこもり行動を助長する結果となりやすい。そこで、本児に対する直接的な働きかけはなるべく避け、教師が本児の好むもので遊ぶなど、適切な見本を示したり、本児の要求をくみとり、それに即応した働きかけをすることにより、教師との好意的な関係ができ、更にこの関係を媒介として、他の児童等との関係づくりも可能になると考えられる。  
この観点から表5のような指導プログラム

⑥ 考察  
一般に人との接触の手段はことばが中心に指導をすすめている。  
⑦ 実践  
ここでは、養護・訓練の時間における指導について述べる。  
二年生の七月より、環境設定や具体的な指導の手だてを考慮し、指導を開始した。  
十二月現在の指導の結果は表6のようである。  
先の指導プログラムの2〜3段階を中心に指導をすすめている。